



# う 羽 化 か

1998年12月  
第11号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣 子  
編集責任者 宗 助 悦 子



## 目 次

情報アクセスをもっと自由な発想で考えよう (中山 玲子) . . . . .	1
教室から 入門期の漢字指導について (伊藤 邦博) . . . . .	4
連載マンガ「となりのシロー君」(10) . . . . .	9
連載「点字から識字までの距離」(10) (山内 薫) . . . . .	13
点字の読みづらさと漢点字の触読について (1) (岡田 健嗣) . . . . .	15
Where・Who・Braille . . . . .	19
交流の必要性と著作権 (宗助 悦子) . . . . .	20
漢点字ってどんな字? 10 . . . . .	21

今回は、日野市立図書館の障害者サービスに勤務しております。まず、中山玲子様にご寄稿いただきました。

## 情報アクセスをもつと自由な発想で考えよう

中山 玲子

それは中学2年くらいのことだったと思う。学校の帰り道、何か甘いものが食べたくなつた私は、コンビニに立ち寄つた。今となつてはこのような店に行けば、全盲の私は先ず店員に商品探しを手伝ってもらふのであるが、当時は何しろ中学生。店員に声をかけることも恥ずかしく、自分のために店員の手を煩わせることに引け目を感じ、しかも、晴眼者のように自分で商品を見つけて買いたいという、つまり、自分の障害を受け入れたくないという気持ちが強かつた。棚に並んだ沢山の商品。「この辺りに食べ物がありそうだ」と思つた私は軽く商品に手を触れてみた。袋に入ったふわふわした物だ。頭の中には甘いものことしかなかった私は真つ先にこれを「柔らかいスポンジケーキだ」と思いこみ、一つ取つてレジに向かう。家に帰るなり空腹のあまり早速袋を開けてみた私。当然甘い香りが

漂うものだと思つていたのに、なぜか魚の匂い。手を入れてびつくり！なんとそれは鯉節だつた。

こんな経験もある。高校生の時、よく行き慣れているコンビニに甘いお菓子を買いに行った。やはり、棚に並んだ商品に軽く手を触れてみると、丸いボール状のものがいくつも袋に入っているものを見つけた。

「なんだろう、これは。でも、まあ、とにかくお菓子売場にあるものだし、甘いものに違いないだろう。煎餅ではなさそうだから」と思い、また店員に確かめもせず買って、家に帰る。早速袋を開けてみると、甘いものに期待を膨らませていた私の心はどんぞこに……。なんとそれは梅の漬け物だつた。

今になつて思えば、なぜこの時、店員の力を借りて商品探しをしなかつたのか疑問である。しかし、これらの出来事は、常に「たとえ全盲であっても、出来る限り自分の力で情報にアクセスしたい」という私の根底に流れている欲求の現れでもあるように思う。それと共に、その欲求は、図書館員としての私の仕事にも大きな影響を与えていると思う。

私は1995年4月から、東京の日野市立図書館で障害者サービスを担当している。よく「図書館に勤めている」というと、「じゃ、文学書なんかをいっぱい読んでいるんでしょ」と言われるが、実は私は子供

の頃からあまり読書好きではなかった。今でも、じつと黙って本を読んでいるより、歌を歌ったり、知らない土地を一人旅したり、そんなことの方が好きである。図書館員となった今ではたしかに本についての知識も深めなければと思っではいるのであるが、未だに文学を読み漁りたいという気持ちはどうもおこらない。好んで拾い読みする本といえば、どちらかというと社会の裏を扱ったもの、つまり、性の問題を扱ったものや、精神的な病気に関する解説書など、ちよつと人には読んでいることを知られたくないと思うような本ばかりに手が行つてしまい、これらの本はパソコン通信の点訳広場から入手している。そのため、利用者や、他の図書館員から、有名な文学作家の話を持ちかけられると、「まずい。その作家のことしつかり調べなければ」と、思いつきり焦り、調べること、自分自身勉強させていたただくのである。

では、そんな私がなぜ図書館員という仕事に夢を持ったかといえば、本というものにとらわれず、知る権利を保障することが基本となる図書館という場で、もつと幅広く「情報」というものをとらえ、どんな人にも個々の目的の情報に気軽にアクセスできるような環境を作つていきたいという気持ちがあつたからである。私自身、一図書館利用者だつた頃、十分に図書館を活

用できなかった思いがある。「図書館員は利用者のプライバシーを護ります」と言われても、「持ち込み資料でも読みますよ」と言われても、自分の抱えている心の問題についての資料を対面朗読や点訳・録音サービスで読もうという勇氣は出なかつたし、ボーイフレンドが送つてきた墨字の手紙を読んでもらう勇氣も出なかつた。しかし、私は今、日野市立図書館を利用する視覚障害者等文字を読むことに障害のある人には同じ思いはさせたくはないと思つている。そこで、「プライバシーや知る権利を護る」という図書館員の心構えを話すことや、対面朗読等のプライベートなサービスを紹介することのみならず、パソコン通信やインターネット、音声化機能のあるOCRソフトの導入等、いかに多様な情報に独力でアクセスできる可能性が開けるか、あるいは、雑誌やその他のマスコミを通じての情報入手手段について出来る限り伝えるように心がけている。先日、障害者と性のテーマをもつと深く掘り下げた資料はないか聞かれた際にも、このことに関する本の紹介の他、丁度この質問者がインターネットを活用している視覚障害者であつたので、先ず私自身がインターネットに自宅から接続し、「障害者、性」というキーワードでサーチエンジンを利用して検索し、出てきたページを利用者に紹介すると共に、そ

の利用者の自宅に行つて、そのホームページにアクセスするとところまでの手順を説明してきたところである。またかなり前になるが、ある男性の視覚障害者から、「風俗店に行きたいと思つても、どこにそういう店があるのか視覚障害を持つ自分にはわからない。以前はそういう店の情報もラジオの深夜番組などで取り上げていたけど、最近は規制がきびしくなつて、ラジオからもそのような情報が得られなくなつた」ということを言われたことがある。たしかに、風俗産業の利用には賛否両論はあるが、そのような議論以前に、このような関連の情報が得られないということに関して、異性の視覚障害者である私に訴えなければならなかつたという彼の気持ちももつと私は多くの人に考えてもらいたいと思う。

未だに私は勉強不足の図書館員でもあるし、図書館利用の下手な視覚障害利用者である。しかし、情報障害のある利用者に信頼を持つてもらえる図書館員として、仕事に対する希望を高めていきたいと思つている。

店の棚に並んだ商品が見えずに悔しい思いをした中学、高校時代。しかし、今、僅かではあるがその悔しさが喜びに代わつている。というのは、自宅から接続しているパソコン通信のデータベースの活用である。特に音楽好きの私は、ときどきCDのデータベースを

利用している。特定のキーワードやアーティスト名、曲名などを指定することで、国内、海外のCDが検索できる。まるでそれは、世界のCDを集めた店で、商品を手にとつて見ているのと同じ感覚である。もちろん、検索料金は高いが、私には何よりも代え難い幸せである。海外のCDはオンラインでショッピングをし、国内のCDは、その検索結果をプリントアウトして、地元のCD屋に持参することが多い。

「視覚障害は情報障害」と言われるが、私は先ず自分自身の実践を通じて、いかにその情報障害を独力で補えるかを追求し、そこで得た幸せを他の情報障害者にも共有できる環境を作つていきたいと思つている。それと共に、思うことは、近年「点字離れ」という言葉が言われているが、点字、録音、大活字、電子データというように、情報の入手手段、発信手段は、自分の最も使い易いというものを個々に選べば良いことであり、もつと自由な発想を視覚障害者に関わる方々や障害者自身には持つていただきたいと思う。例えば、中途失明の方の中には、点字を覚えることや音訳サービスを利用することには抵抗があり、失明以前と同様に、自分自身で活字の資料を読みたい、それには盲重用OCRを使うのだという強い願いを持つている人もいるのだから。

教室から

## 入門期の漢字指導について

小学校教師 伊藤 邦博

私は今年小学校一年生を六年ぶりに担任しています。十一月は私の勤務する学校では、五日間にわたり、子どもたちの保護者の方と個人面談を行いました。子どもたちの学校での学習ぶり、生活ぶり、友達関係のことなどを話したり、子どもたちのおうちでの様子やお母さんやお父さんの子育ての方針や喜びや悩みなどを聞いたりします。

今年も何人かのお母さんから「先生は漢字のテストをしませんね。」という質問を受けました。私は「その通りです。私の一番嫌いな仕事はテストの丸つけです。」と答えます。そして「そのかわり、ノートや見つけた帳（これは一人一人に持たせている詩のノートの名前です。）は毎日点検していますよ、私はそのほうがうんと楽しいですから。」と答えます。そして漢字のテストについて話を続けます。「去年担任していた子どもたちのクラスでは一度も漢字のテストをしていません。中学校に進学しても私の担任してきたクラ

スの子どもたちが漢字で苦勞しているとも聞きませんし、ましてや漢字の成績が落ちることもきいていません。」とお話します。お母さん方はびつくりしますが、必ず「なぜですか。」と問い返してきます。

無理ありません。お母さん方自身、度重なる書き取りの練習とテストという漢字教育しか受けてこなかったのですから。私自身もそうした漢字教育しか受けてきませんでしたし、教師になつてからもそうした漢字教育をしてきました。漢字学を手に入れたのがおよそ十年前ですし、私の教室から漢字のテストを追放したのはここ六年ばかりのことです。話をしているお母さん方の年齢は私が教師になつたころ、私も教えていた世代です。ちよつぱり複雑な気持ちです。

反省の気持ちをこめて、私は丁寧に答えていきます。漢字が人間の生活の営みの中から生み出されてきたことや、象形文字から会意文字、形声文字を法則性をもって作り出されてきたことなどを話します。漢字は教師が教科書の配列順に、字源や漢字の構成などは一切無視して、この漢字はこう書くのといった指導をし、その後はドリルなどを使って子どもたちに書き取りの練習をさせ、テストをするという、今までの漢字学習が間違つており、子どもたちの知的好奇心を満足させる漢字の授業こそが漢字に対する関心を深め、漢字学

習の意欲を増していくことを説明していきます。

一年生の文字に関する学習内容は膨大です。

平仮名だけでも次の内容を指導しなければなりません。

①平仮名の清音五十音 ②濁音 ③長音（ここには

表音不一致があります。工段と才段の長音はそれぞれ

「い」「う」と表記し、発音は「え」「お」となります。

④促音 ⑤拗音 ⑥そして拗長音 ⑦さらに

助詞の指導（『は』『へ』『を』の表音不一致な助詞

は厄介です。助詞は単語と単語をくつつける接着剤の

役割を果たしているということをきちんと押さえながら

丁寧な指導を展開していきます。

これだけでも一年がかりで繰り返し指導が必要です。

そしてカタカナも指導します。さらに漢字八十字と

続きます。

ため息をつかれるかもしれません。しかし日本語の

豊かな使い手に成長してもらうためにはこれらはどう

しても身につけてもらわなければなりません。子供た

ちの知的好奇心を満足させながら楽しい授業を展開し

なければなりません。日本語の学習がつまらないなん

て言わせるわけにはいきません。

今回は一年生の入門期の漢字指導について私の実践

を書いてみました。

漢字の学習は二学期早々から始めました。

一年生で学ぶ漢字は学習指導要領により次の八十字

が決められています。

木	町	千	女	三	九	一
本	天	川	小	山	休	右
名	田	先	上	子	玉	雨
目	土	早	森	四	金	円
立	二	草	人	糸	空	王
力	日	足	水	字	月	音
林	入	村	正	耳	犬	下
六	年	大	生	七	見	火
	白	男	青	車	五	花
	八	竹	夕	手	口	貝
	百	中	石	十	校	学
	文	虫	赤	出	左	気

これらを分類してみると次のようになります。

象形文字	38字	47・5%
会意文字	18字	22・5%
指事文字	10字	12・5%
形声文字	10字	12・5%
仮借	4字	5・0%

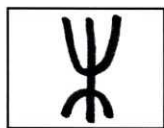
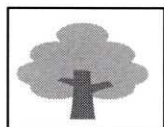
漢字が象形文字から始まりそれを発展させ、会意文字、形声文字と発展させ、字数を増やしていった経過

を考えれば、入門期としては妥当な配当です。

私の漢字指導も当然、象形文字の学習から出発します。

八つ切り大の板目紙を切って一辺十三センチの正方形を六枚作ります。一字の漢字に四枚使います。

『木』という字は、木の絵を書いたもの、二枚目には大昔の漢字、三枚目にちよつと昔の漢字、四枚目には、今の漢字の『木』を書いておきます。次のようなカードです。



『木』『日』『川』『月』『山』『目』『雨』『鳥』  
『魚』『馬』『黒』『門』なども同様に一文字につき  
4枚づつ作っておきます。

始めに「今日から漢字の勉強を始めます。」といひます。子どもたちはそれだけで歓声を上げます。そして『木』の絵を見せ黒板に貼り出します。続いて大昔の漢字、ちよつと昔の漢字をその下に、最後に今の漢

字を貼り付けます。すでに木という漢字は知っている子どもがほとんどですが、子どもたちは大喜びで「あつ、似てる、似てる。」と大声をあげます。子どもたちはこれだけで漢字の成り立ちを理解します。「漢字は絵からできたんだ。」と。

続いて『日』『川』『月』『山』も同様に貼り出していきます。

残りの『目』『雨』『鳥』『魚』『馬』『黒』『門』などはカードをばら撒き四枚一セットに集めさせます。子どもたちはもう大騒ぎです。『鳥』『魚』『門』などはなかなか難しいのですが、興味津々。考えて考えて何とか四枚一セット仲間集めをしました。ここでまとめをしました。

昔は人やものや生き物などの形を絵のように書いて、言葉の代わりに使いました。このように絵から漢字ができました。

子どもたちはこのまとめをすつきり納得しました。あとは同じような漢字遊びをさせて子どもたちを楽しませます。

遊びを取り入れながらこんな授業を行いながら、子どもたちがある程度の数の漢字を習得した段階で、次の指導「漢字と音」に入りました。

③	②	①
力	足	目
車	山	木

の六枚の漢字のカードを提示します。①の目は「め」と読むから一つの音の単語を表す漢字であること、足は「あし」と読み二つの音の単語を表す漢字であることとを指導します。そして音の数を・で表していきます。目は目、足は足というように。残りの漢字についてもノート作業をしながら・をつけさせていきます。そのあとは今まで学習した漢字を思い出しながらノートに書き出し、・をつけていきます。最後におまけに湖という字を提示しました。一年生の私のクラスではこの文字の読み方を二人の子どもが知っていました。みずうみと読むことを教え、音の数が四つであることを確

認した後で、次のように板書しながら、まとめをしました。

音の数	平仮名	漢字	意味を表す絵
一つ	て	手	
二つ	あし	足	
三つ	くるま	車	
四つ	みずうみ	湖	



次のようにまとめました。

漢字は単語を表す文字です。単語はいくつかの音からできています。平仮名やカタカナは音だけを表す文字ですが、漢字は音だけでなく意味も表している文字です。

平仮名は普通ひとつの文字でひとつの音を表します。ところが漢字は単語を表す文字ですから、ひとつの漢字が一つの音、二つの音、三つの音、とくに四つ以上の音を表すこともあります。

ここまでで漢字は一つ一つの文字に形・音・義があることが指導できました。

かつて受け持った一年生の子どもでこんな文を書いた子がいました。

きのう こうえんに いきました。

私が漢字学を知らなかったせいです。今年のクラスの子どもたちにはこんな表記をする子どもはいません。現在指導していることは、筆順の原則と漢字は十の画で形作られていることについてです。

- ①縦線
- ②横線
- ③斜め線
- ④かくかぎ
- ⑤斜めかぎ

⑥手かぎ ⑦つりばり ⑧くのじ ⑨あひる ⑩てんの十の画をさまざまの大きさのものを画用紙に印刷し、各画別に色分けし切りぬかせました。これを使って漢字を机の上に作っていきます。子どもたちは大喜びで、次々に漢字を作っていきます。これでどんな漢字もできるんだねといながら。

私のクラスの子どもたちは漢字の学習が大好きです。指導者が漢字学を学びとり、遊びをふんだんに取り入れ、知的好奇心を満たしていけば、子どもたちは漢字と自然に戯れ、身につけていきます。もちろん漢字のテストなどは一切やりません。



# となりのシロ-君 (10)

漢点字のイロハと部首



知ってる  
63!

そう  
何もない  
マスあけも  
含めると  
64  
通りね

漢点字には  
一マス一マス三マス  
のものがあるけど  
一マスの  
漢点字は  
このうちの  
2点以上の  
組み合わせだけ  
使うのよ

だから  
マスあけと  
一点を除いた  
57個の  
一マスの  
漢点字が  
あるのね

この一マスの  
漢点字は  
上に二つの  
点が付くの  
始点と終点  
と言って  
漢点字だと  
わかる印なの

マスの漢点字  
64 - 7  
= 57  
ソツカー

それで八点なんだ  
じゃあ漢点字は  
八つの点全部を  
使ってるんじゃないんだね

シローくんが  
使ってる  
かなの点字と  
同じ六つの点で  
できてるのよ

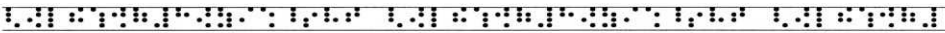
下6点に  
注目!

あいうえおの点字に  
漢点字の印を付けたら  
どうなるかな?

シローくん  
あいうえおの  
点字をかいてみて

はいおまて

おやういす



この中の「あ」は  
点が一つだけだから  
一マスの漢点字には  
使わないのよ

じゃあ  
よく見てね

お え う い あ

へえ  
かなの点字の上に  
点を付けるだけで  
漢点字が  
できちゃうんだ?

全部  
そうなの?

頁 言 家 糸

全部そうよ  
だから五十音を  
覚えてから  
その上に  
漢点字の印を  
付けると  
どうなるか

この順序で  
覚えていくと  
いいのよ

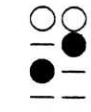
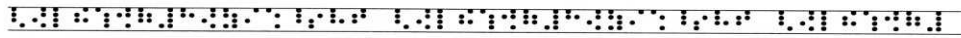
ぼくは  
五十音全部  
知ってるよ

今書いた  
漢字なら私も  
知ってるわ

それじゃ  
一つずつ  
漢字の画も  
覚えながら  
やってみま  
しょうよ

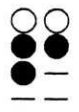
始点 終点

かなの点字  
五十音



頁

よこ線、小さいノ  
目(たて線、上かくかぎ、よこ線3本)  
八(左右の短いなめ線)



言

(え)の上で二つの点  
点、長いよこ線、短いよこ線2本  
下に口(たて線、上かくかぎ、よこ線)

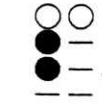


家

うかんむり  
の(下に)家(めた)  
点、短いたて線  
短いうかくかぎ  
よこ線、ノの字、てかぎ  
その中にノの字二つ  
右側にノの字、右ななめ線



茶 ←



糸

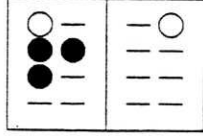
(い)の上で二つの点(始点と終点)  
くの字  
下ななめかぎに点  
たて線、左右に点



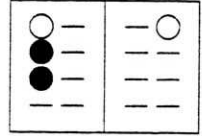
(お)の上で二つの点

頁は

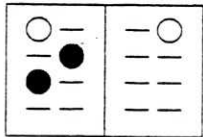
一ノ目ハダよ



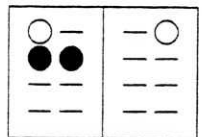
言 偏  
ごん べん



糸 偏  
いし へん



おおがい



ウ 冠  
うかんむり

上の点が  
漢字だつてこと  
教えているのよ



これが部首にも  
なるんだよね



## 点字から識字までの距離 (十)

山内薫(墨田区立緑図書館)

私事になるが、この十月に『あなたにもできる拡大写本入門―広げよう大きな字』(株式会社大活字刊、定価本体二千円)という本を出版した。この本は、一九八七年に刊行された『拡大写本の作り方』(東京ルリユール刊)を全面的に改訂したもので、出版社がなくなつてしまったために永らく入手できないでいたものである。拡大写本については既にこの連載で取り挙げたので、お分かり頂けると思うが、音訳や点訳と比べ、拡大写本は一般にも、当の利用者である弱視の人たちにもほとんど知られていない。そんな中で今回新たにこの本を出版した背景について、この紙面をお借りしたいと思う。

現時点で拡大写本の作り方に関する本を出版することの意味について、端書きの中で私なりに三点を挙げてみた。第一は大きな文字に対する社会的な需要が増してきていることである。そのことを最近特別養護老人ホームなどで貸出を行うようになって切実に感じている。そこで借りられる本の半数近くが大きな活字の本であり、中には細かい文字では読みにくいといつて、

名作を子供向きに抄訳した字の大きい児童書を借りる人もいる。また入所しているお年寄りがリハビリの一環として歌う昔の歌の歌詞を、拡大写本で大きく書いてほしいという要望も出されてる。世の中でも岩波文庫の背文字が大きい文字になったり、新聞の活字が少し大きくなるなど、今後高齢者人口が急激に増えていく中で、大きな文字がますます必要とされることは間違いないと思われる。だから即拡大写本とはならないにしても、大きな文字に関する認識を新たにしよう点では少しは意味があるものと考えている。

第二点は、単に大きく書いたり、大きな文字であればよいということではなく、どのように大きければ読みやすいのかを考える必要があるのではないかということである。前にも述べたが弱視の人は「百人いれば百通りの見え方をしている」といわれているように、一人一人の見やすさ、読みやすさが個々に全く違っている。私たちが文字を読む場合にも、これはある程度当てはまるのではないか。読むものによって横書きの方がよかったり、ある文章の中でポイントとなる文字が目立っていたり、フォントや字間、行間をどう工夫すればより読みやすいものができるのか、もつと追求する必要があると日頃から考えている。この本では一つの試みとして漢字は大きめに仮名は小さめに書くと

いう例をいくつか載せている。駅頭の文字放送などを見ると、そこで使用されている文字は、漢字に比べて片仮名などが非常に小さい文字になっていることに気付かれた方も多いと思う。つまり一画面になるべく多くの情報を入れるためにそういう工夫をしている訳で、複雑な漢字に比べて仮名は画数が少ないので、多少小さくても判読できるのである。そうした読みやすさの追求という視点から拡大写本のことを考えてみてほしいと願っている。

そして三点目は、今後ワープロやパソコンがますます普及していき、私たちが手で文字を書く機会が減少していくことが予測される中で、文字を手で書くということを考える契機にしてみられたいという思いである。拡大写本という「ワープロやパソコンがこれほど普及し活字の大きい文字が簡単に打ち出せるのになぜ手書きなのか」という疑問が必ず発せられる。確かに全国の拡大写本グループでは既に検討中も含めて半数近くのグループがワープロやワープロで写本づくりを行っている。しかしすべてを手書きで対応しているグループも四割以上にのぼっており、機器を導入しているグループでも使用する主な理由として挙げているのは、作業時間短縮、訂正修正の効率などが主で、利用者からの要望への対応と回答したのはわずかに割弱、

仕上がりが美しいと回答したのも一割強にすぎない。

（「平成十年度拡大教材製作に関する調査結果」回答グループ数四三）身近な利用者からの求めに応じて期限を限定された拡大教科書を作成しているグループでも、手書きが主流であることがこの調査結果を見てもわかる。私の経験からいっても、どちらかと言えば手書きの方が読みやすいという弱視の人の方が多い。よくいわれるのは活字よりも手書きの方が目に優しいという感想だが、その理由として考えられるのは手で書くことの中に籠められる書き手の微妙な意識ではないかと考えている。もちろん読みやすい字で書かれなければ問題外だが、ある程度訓練された書き手の文字は目の疲労が少なく、見ることの苦労が軽減されて読解力が高まり、読書意欲も湧き、読書が楽しくなるという感想を述べている弱視の人もある。つまり伝達を前提とした手書きの文字は読み手を想像して書くことの中に書き手の意識が反映しているのではないかと考える。こうした意味でも、手で文字を書くということについて再考してほしいという思いが強い。識字という問題をこうした広い視野で捉えることもこれからの課題として考えてほしいと思っている。

どうぞ、図書館などでリクエストして読みいただき、率直な感想を寄せ下さるようお願いいたします。

序

これまで、視覚障害者にとつての読書、あるいはそれを巡る環境の変遷について考えてきた。視覚障害者の読書は一般のそれと同様、産業革命の進展に伴う大衆の成立に始まり、生産技術の進歩と経済の拡大がそれを支えてきた。しかしその読書は一般とは異なり、市場から供給されるだけでは実現されないもので、他の力、公共的なサービス、あるいは私的なボランティア活動に担われてきたこと、視覚障害者（読書以外の分野では他の身障者にも言えることだが）にとつて、自由な意志の発現によつて実現できるものでなく、しかも市場経済は、そのようなサービスの提供を、枠組みごと支配していることについて述べてきた。そこで本稿では、視覚障害者の読書は、独力では果たせないこと、他者の助力なしには成立しないことを踏まえて、その方法の如何なるものかを考えてみたいのである。現在のように、読書の機会が誰にも開かれ、何時で

も何処でも本を手に行けるのは稀有なことである。印刷技術の進歩は、そのコストを大幅に引き下げ、新しい社会の主人公となった大衆に、大量の知識と情報を供給している。至る所に書店があり、至る所に活字メディアは待ち構えている。現在ではインターネットなどの通信手段が、居ながらにして活字の情報を供給するまでになった。かくして個々の力量と関心に依じて、何者にも妨げられずに読書は実行される。そしてその質と量は、個々の力量と関心が決定し、しかもそれが社会的な位置付けにも直結する。人々は挙つて《今》必要とされる知識・情報を、この読書に求めるのである。

求めるものは視覚障害者も全く変わらない。社会的な位置付けに直結される以上、読書を通して求められる知識・情報に無関心ではいられない。一九六〇年代以来、視覚障害者の高学歴化が大幅に進んだ。現在では全国の大学在学者数が七、八十人に上るといふ。その数値に年数を掛けると二、三千人の進学者を数えることになる。いかにもこのことは、視覚障害者への機会均等が進んだかに見える。一面はそうであろう。しかし、六〇年代の大学では、「漢字を知らない」、「視覚障害者を受け入れる設備がない」などの理由で、国立・市立を問わず多くの大学はその門戸を閉ざしてい



た。現在では、個々の大学の受け入れ状況を詳らかにしないが、受験を拒否する大学は聞かなくなった。しかし、「漢字を知らない」視覚障害者を七、八十人も在学させている現在、そのことについての公式な弁明も、やはり詳らかにしない。視覚障害者と「漢字」との関係は、今も六〇年代と変わっていない。大学在学、あるいは終了者ほぼ全員が、「漢字」を使用せぬまま今に至っているのだ。視覚障害者の初頭・高等教育関係者も、大学も、また視障者自身も、このことを不問に付し、口を噤んでいるのが現状なのである。

## 一 視覚障害者の読書法

読書は、社会的な位置付けのみを目的に行なわれるものではない。書物そのものに心惹かれてなされるものだ。かつては、学校教育でもそのような指導がなされ、また身近に書物に親しむ人も多かった。しかし現在、読書をそのように考える者は少ないらしい。視覚障害者の読書に対する関心も同様に推移している。現在のニーズを大掴みに言えば、大衆読み物、ハウトゥー物、学校教材だ。娯楽が必要に迫られての読書だ。

視覚障害者と「漢字」との関係を考えるには、このことは、大きな要点である。

\* \* \* \* \*

### 点字からテープへ

点字離れが言われて久しい。戦後の経済復興と拡大は、視覚障害者の読書の手段を大きく変えた。

一九六〇年代はじめまでの視覚障害者の読書環境は、極めて貧しいものであった。日本点字図書館の蔵書だけが頼りだった。盲学校の図書室にも、僅かの読み物と理科の教科書はあったが、図書室を根城とするような生徒はいなかった。

点訳書の選書は、視覚障害者のニーズによるのではなく、点字図書館の職員あるいは点訳者が行なっていた。点字書の製作は、「点訳奉仕者」と呼ばれる点訳者が、手打ちで製作した。このように人的にも、器材の面でも、またそれを支える経済の面でも、極めて乏しい時代であった。視覚障害者に対する書物の情報提供も皆無であつて、許される読書から誘発されるニーズも極めて貧しいものであった。

当時の点訳は、勿論かな点字の分かち書きで、句読

点もなかった。それらを読むことは、文字をたどる読書ではなく、音をたどる読書と言つていい。点訳された点字書は、〈名作〉が多く、新しい話題作は少なかった。(私見ではあるが、当時の状況から、その選択は概ね間違つてはいなかった。)後に触れることになるが、このかな点字は、一八九〇(明治二三)年、石川倉次先生の考案したものを、当時の文部省が「日本語点字」として制定したもので、現在一般には顧みられることのない《民衆には漢字の習得は困難》という思想を色濃く含んだものである。これはいわば文化的タイム・カプセルと言つていいものであつて、この思想は、現在でも視覚障害者を対象に、しばしば言及されている。

六〇年代に入つて、録音用磁気テープの導入がはかられた。当時欧米では、ソノシートに朗読を収録して、音声化した書物として視覚障害者に提供し始めていた。しかし日本点字図書館では、ソノシートの使用は、技術的にもコスト的にも解決しなければならぬ問題が多く、やはり欧米で普及し始めていた録音用磁気テープ(オープンリール)の採用を選択した。当時、磁気テープはその生産と受容が増大し、まだ高価なものではあつたが、一般の電気店やレコード店の店頭で手に入るようになっていた。録音装置も、学校などの施設

に備わりはじめており、一般家庭に普及するにはまだ時間がかかりはするものの、手の届かないものではなくなりつつあつた。我が国の音訳への一歩であつた。

音訳は、中途失明者、とりわけ第二次世界大戦の傷病者に対するサービスとして、欧米で始まつた。録音技術の発達は、触読の困難な視障者に読書の機会を与えるものとして脚光を浴びた。欧米の取り組みは極めて迅速だったため、磁気テープの開発に先立つ技術、すなわち録音盤を採用しなければならなかつた。最先端の技術LP (Long playing record) の回転数を四分の一度に押さえて録音時間の増加をはかり、薄い塩化ビニール(ソノシート)の使用でコストの軽減をはかつた。これは、大量に、また迅速に複製することができ、等質の音訳書を広範囲に供給することを実現した。しかし、これは音楽用のレコード・プレイヤーでは再生できないもので、特殊な装置が必要であつた。また、録音装置の複雑なこのシステムは、ニーズの多様化と増大に対応できなくなり、磁気テープにその地位を明け渡すこととなつた。

磁気テープは、録音と再生がリアルタイムかつ場所を選ばずできるのが特徴で、しかもアームを盤に載せるといふ微妙な操作も必要としないところから、加速度的に普及した。欧米では七〇年代までソノシートも

使われていたが、磁気テープの低価格化は、たちまちその座を奪った。その磁気テープとは、六〇年代後半から販売が始まったカセット・テープである。

\* \* \* \* \*

### カセット・テープと点字離れ

七〇年代の我が国の音訳媒体は、このカセット・テープに落ちついた。六〇年代後半から我が国も、大量生産・大量消費の時代に入った。音楽媒体として開発されたカセット・テープは、そのシンボリックな商品である。音楽の大量消費とともに、それも大量に消費された。その運動は、生産・流通のコストを低減し、その価格を大幅に押し下げた。視覚障害者はそれを音楽用としてだけでなく、音訳用として使用した。オーブ・ンリールの磁気テープを使用して始まった音訳も、ここに来て急速に広がりを見せた。

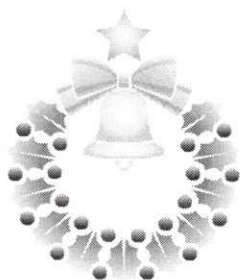
経済の拡大は、ボランテニア活動の活発化を促した。それまで「奉仕」と呼ばれていたものが、「ボランテニア」と名を変えたのもこのころである。

ボランテニア志望者の増大は、視覚障害者の読書環境を一変させた。七〇年代に入って、それまで点字図

書館の蔵書を借りて読書していたのが、地域のボランテニア・グループや、福祉団体が窓口になって、プライベート・サービスを始めたのである。それまで、個別のニーズへのサービスがなされなかつたことへの反省と、ボランテニア活動の活発化がそれを可能にしたからである。

しかしそのニーズは、点字を離れて音訳へ殺到した。

(次号では、点字離れの理由と、音訳の限界について考えます。)



## Where · Who · Braille

故川上先生のご指導で、漢点字を習得して使用している視覚障害者が、全国各地で漢点字の活動を続けておられます。

視覚障害者を対象とした漢点字の講習会、ボランティアを対象とした漢点字訳の講習会、そして公共図書館や点字図書館に働きかけて漢点字への理解を求め、蔵書に漢点字訳書を加えていただいたり、地道な活動が行なわれています。

前号にご寄稿下さいました鳥取県の野島静先生もその一人です。ご自身で漢点字の小さな辞典を編纂されたり、ボランティアの皆様は漢点字をお教えになったり、八面六臂のご活躍です。

願わくば、そのような各地のボランティアの皆様や漢点字使用者の視覚障害者の皆様と手を結び、漢点字普及の大きな環を結べたらと夢見ております。

以下は本会の利用者で、新潟県にお住まいの星<sup>ほし</sup>庚<sup>こう</sup>吉<sup>きち</sup>様が新潟県点字図書館へ送られたお便りの一部です。

館便り『メールにいがた 第一二号』（一九九八年一月）から転載させていただきました。

この度は「気功術」に関する書籍3種類お送りいただき感謝いたします。いわゆる「館間協力」でやっていただいたようですね。素晴らしいことだと思います。

さて今回お送りいただいた点字書を読んで私はとても悲しい思いをしました。気功は中国文化の重要な部分であり、従って漢字の羅列が当然のことです。しかしかな点字ではそれを読みとることは困難でした。子供に漢和辞典をひいてもらうことさえできません。涙が出ました。くやし涙です。あんなに素晴らしい漢点字があるにもかかわらず、どうしてこんな思いをしなければならないのでしょうか？～中略～

点字図書館が本当の意味で視覚障害者の文化の拠点であるとしたなら、私は今こそ漢点字の普及に図書館として関わるべきではないかと思えます。如何でしょうか？漢字なくしてどうして日本の文化を理解することができましょうか。～後略～

（湯之谷村 星さん）

## 交流の必要性と著作権

会員 宗助 悦子

九月の朝日新聞に聴覚障害者のための「パソコン要約筆記」（パソコンを使用して、テレビや会議等の音声情報を文字情報に変えて聴覚障害者に伝える手段）の活動をしているボランティア団体が、テレビドラマの字幕化について、日本脚本家連盟から「許諾に伴う使用料」を請求されたとの記事が載っていた。同団体は、「耳が聞こえないという理由で、情報が制限されてしまうのは不公平。障害者の情報保障という点で、メディア利用をもっと理解してほしい」と、言っているという。

パソコンの普及により、著作権等の問題がインターネット等でも起こっている。障害者に対するボランティア活動においても、厳しくなっているのが現状であろう。本会でも、パソコンを利用してゐる為、点訳活動における著作権の問題にはかなり気をつかう。

しかし、ここで問題にしたいのは、視覚障害者同志はもろろんのこと、他の障害を持つ人やボランティア団体との接触が無いことである。

今回の様なことは、メディアを加工しなければ利用

できない感覚器障害者に共通する問題である。日本脚本家連盟や日本著作権協会等に理解を求めるためには、団体毎に話し合いをするのではなく、同じ問題をもっている種々の障害者及びボランティア団体が協力して話をすすめた方が大きな力となるのではないだろうか。仮に一つの団体、一つの障害に対して特定の協会や連盟より理解を得られたとしても、他の団体及び障害をもつ人々に対しても同様に許可されたことにはならないのはもろろんのこと、すべてのメディアに対して無条件に許可された訳でもないのである。

本会でも、点訳書を作成する際に書籍毎に許可を得ている。本来なら、書籍毎に許可を得なくてもすむようにならなければいけないと思う。そしてこれは、本会の中だけで解決する問題はなく、関係するすべての障害者及びボランティア団体が同時に解決されるべきであると思うのだ。個人や地域を越えて、諸機関に理解を求め、一定の条件のもとに許可を得られるようになるべきなのではないだろうか。

そのためには、どの様にすればよいのかはわからない。すくなくとも、他の障害を持つ人や団体との交流は必要なのだと思う。しかし、どこの団体でも自分たちの活動で手一杯なのが現状であろう。どうしたらよいものか。また課題が一つ増えた。



1里は、中国では約500メートル、我が国では約4キロメートル。  
「予 𠄎 𠄎 𠄎」は円い輪を押しやる形の象形文字。大きく広がる意。  
自称は、仮借。

**横 (𠄎 𠄎 𠄎)** “木 𠄎 𠄎 𠄎”と“黄 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎”からなる形声文字。  
音は「おう」、訓は「よこ」。傍の黄の上部は火の燃える様の廿印、四方八方に飛ぶ火矢を表わす象形文字。  
「横」は横木が四方に張り出した形。

「黄」の漢点字は〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉。色の字であることを示す〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉と、音「こう」の「こ」を採って〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉から作られた。漢点字では一マス目に〈𠄎 𠄎〉の点符号を置いて色を表わす字が6つある。

「黄」の他に、「赤 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「緑 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「青 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」  
「紫 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「黒 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」。

**降 (𠄎 𠄎 𠄎)** “阜 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎”と音符「こう」(おりる)からなる形声文字。音は「こう」、訓は「おりる、ふる」。音符号の傍は、人が高いところからおりることを表わす象形。  
「降」は丘を下ることを明示した字。

漢点字では「阜」(こぎと)を〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉で、音符「こう」を〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉で表わした。〈𠄎 𠄎〉は、傍の中に「井 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」に似た字が含まれるところから採った。

「おりる」には「降」と「下」が用いられる。乗り物から“降りる”、霜が“降りる”、役を“降りる”。階段を“下りる”、幕が“下りる”、許可が“下りる”。

**冬 (𠄎 𠄎 𠄎)** 作物を収穫して貯蔵する意を表わす象形文字。  
音は「とう」、訓は「ふゆ」。作物を収穫する象形の下に 𠄎 (こおり)を加えて氷結する季節の意とした。  
漢点字では〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉、〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉は“冬頭”として用いる。

**雨 (𠄎 𠄎 𠄎)** 空を大きく覆って降る雨の象形文字。音は「う」、訓は「あめ」。漢点字では〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉で表わし、〈𠄎 𠄎 𠄎 𠄎〉は「雨冠」として用いる。

「雨冠」の字は、「雲 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「雪 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「雷 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」  
「露 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「霧 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「霰 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「雹 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」  
「霰 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」「靄 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎」

「武蔵」(むさし)は多摩川と荒川に挟まれた地域、現在の東京都全域  
武蔵野はここでは皇居の西側か。

筆 擱（オ）いて 月の兎となりたまえ

小 倉 朔 太

K君が亡くなった。急逝という言葉そのままの死だった。66才のまだこれからという若さ(?)で、やり遺したことも多々あったろうに。大所帯の俳句会の世話役として長いこと会をとりきってきただけに彼を失った損失は大きい。月の明るい晩、彼はわづらわしいこの世を去っていった。

海に出て木枯（コガラシ）帰るところなし

山 口 誓 子（セイシ）

木枯の吹きすさぶ季節がやってきた。そこで木枯の句を一句。誓子のこの句は太平洋戦争末期の昭和十九年の作。野を吹き木の葉を落としながら吹きすさんで行った木枯は、何も吹くもののない海上に出て消え失せるのであると木枯を擬人化したものと見るか、はたまた木枯は海に出たが最後、再び帰る陸はない。まるで片道のガソリンだけを積んだ特攻機そっくりである。戦争の真っ最中だったから特攻機を悼むところを木枯に託したのだとの説もある。（朔）

### 編集後記

今年もまもなく暮れようとしています。

この一年間、「うか」を発行し続けることができませんでした。また、テープ版・ディスク版の読者も増え、現在約四十余名の視覚障害の皆様にお送りすることが出来ました。これも偏に多くの方々のご寄稿とご理解ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

来年も、皆様のご協力のもと、「うか」に点訳活動に励んで行きたいと考えております。

テープ版・ディスク版をご希望の方、点訳希望の書籍・新聞記事等ございましたら、いつでもご連絡下さい。

【連絡先】電 話 03・3613・3160

代 表 岡田 健嗣（八木沢療院内）

F A X 045・261・1723

宗助（むねすけ） 悦子

よいお年をお迎えください。  
次回の発行は二月十五日です。

宗助 悦子

\*本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載はかたくお断り致します。